

武蔵野日曜集会

五千人のパン

――ヨハネ伝第6章1～14節――

1984年4月15日（武蔵野）

小池辰雄

キリストの最大の奇蹟 学問も常識も科学もどうにもならん 神さまのエネルギーに満たされる 無限無量の生命の徴 絶対次元の霊法の働き クリスチャンは絶対孤 己を裂いて与える ような霊的生命の証者

【ヨハネ6:1～14】

1 この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方にゆき給えば、
2 大なる群衆これに従う、これは病みたる者に行いたまえる徴を見し故なり。
3 イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給う。4 時はユダヤ人の祭なる過越^{すきこし}に近し。5 イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見てピリポに言い給う『われら何処よりパンを買いて、此の人々に食わすべきか』6 かく言い給うはピリポを試むるためにて、自ら為^なさんとする事を知り給うなり。7 ピリポ答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしづつ受くるになお足らじ』
8 弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子^{わらべ}あり、大麦のパン五つと小き肴^{さかな}二つとをもち、然れど此の多くの人には何にか為^ならん』10 イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。11 ここにイエス、パンを取りて謝し、坐したる人々に分ちあたえ、また肴^{さかな}をも然^{しか}なして、その欲するほど与え給う。12 人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『廃^{すた}るもののなきように擘^さきたる余りをあつめよ』13 すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの擘^さきたるを食いしものの余り、十二の筐^{かご}に満ちたり。14 人々その為し給いし徴を見ていう『実^げにこれは世に来るべき預言者なり』

●キリストの最大の奇蹟

今日のところはキリストの最大の奇蹟と言つていいところです。ところが、この最大の奇蹟の記事は、これだけがマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと全部の福音書に出ている。他に奇蹟でもって四福音書全部に出ているのはない。それだけ、このいわゆる奇蹟が驚くべきものであるということが分かるわけです。



マタイ伝14章13節から、

「¹³イエス之を聞きて人を避け、

「これを聞きて」というのは、その前に洗礼のヨハネが殺された記事がある。

其処より舟にのりて寂しき処に往き給いしを、群衆ききて町々より徒歩にて従いゆく。¹⁴ イエス出でて大なる群衆を見、これを憫みて、その病める者を医し給えり。¹⁵ タベになりたれば、弟子たち御許に來りて言う『ここは寂しき処、はや時も晩し、群衆を去らしめ、村々に往きて、己が為に食物を買わせ給え』¹⁶ イエス言い給う『かれら往くに及ばず、汝ら之に食物を与えよ』¹⁷ 弟子たち言う『われらが此処にもてるは唯五つのパンと二つの魚とのみ』¹⁸ イエス言い給う『それを我に持ちきたれ』¹⁹ 斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを擘きて、弟子たちに与え給えば、弟子たち之を群衆に与う。²⁰ 凡ての人、食いて飽く、擘きたる余りを集めしに十二の筐に満ちたり。²¹ 食いし者は、女と子供とを除きて凡そ五千人なりき。』（マタイ14・13～21）

大変なことです。

それからマルコ伝8章30節、

「³¹斯て人を避けて、

この「斯て人を避けて」というのも、洗礼のヨハネが殺された記事のあとです。

舟にて寂しき処にゆく。³² その往くを見て、多くの人それと知り、その処を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼等よりも先に往けり。³⁴ イエス出でて、大なる群衆を見、その牧者なき羊の如くなるをいたく憫みて、多くの事を教えはじめ給う。³⁵ 時すでに晩くなりたれば、弟子たち御許に來りていう『ここは寂しき処、はや時も晩し。³⁶ 人々を去らしめ、周囲の里また村に往きて、己がために食物を買わせ給え』

ここところは全くマタイ伝と同じです。

³⁷ 答えて言い給う『なんじら食物を与えよ』弟子たち言う『われら往きて二百デナリのパンを買い、

これはマタイ伝には出ていない。

これに与えて食わすべきか』³⁸ イエス言い給う『パン幾つあるか、往きて見よ』彼ら見ていう『五つ、また魚二つあり』³⁹ イエス凡ての人の組々となりて、ここはマタイ伝は詳しいですね。

青草の上に坐すことを命じ給えば、⁴⁰ 或は百人、あるいは五十人、畝のごとく列びて坐す。⁴¹ かくてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付して人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎



に分け給う。

このところは魚のことも出ている。

42 凡ての人、食らいて飽きたれば、⁴³ パンの余り、魚の残りを集めしに、十二の筐^{かご}に満ちたり。⁴⁴ パンを食らいたる男は五千人なりき。」（マルコ6・32～44）

マルコ伝が非常に詳しく書いてある。それからルカ伝9章10節、

「¹⁰ 使徒たち帰りきて、その為^なしし事を具^{ぐい}にイエスに告ぐ。

ルカ伝は洗礼のヨハネの記事がないんです。

イエス彼らを携えて窃^{ひそか}にベツサイダという町に退きたもう。¹¹ 然れど群衆これを知りて従い来りたれば、彼らを接^あけて、神の国の事を語り、かつ治療を要する人々を医^いしたもう。

これはマタイ伝と同じだな。

¹² 日傾きたれば、十二弟子きたりて言う『群衆を去らしめ、周囲^{まわり}の村また里にゆき、宿をとりて、食物を求めさせ給え。我らは斯かる寂しき処に居るなり』¹³ イエス言い給う『なんじら食物を与えよ』弟子たち言う『我らに、ただ五つのパンと二つの魚とあるのみ、この多くの人のために、往きて買わねば他に食物なし』¹⁴ 男おおよそ五千人いたればなり。イエス弟子たちに言いたもう『人々を組にして五十人づつ坐せしめよ』¹⁵ 彼等その如くなして、人々をみな坐せしむ。¹⁶ 斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、擘^さきて弟子たちに付^つし、群衆のまえに置かしめ給う。¹⁷ 彼らは食いて皆飽く。擘きたる余りを集めしに十二筐^{かご}ほどありき。」（ルカ9・10～17）

●学問も常識も科学もどうにもならん

それから、今日やるヨハネ伝6章1節、

「この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方にゆき給えば、

「海」というのはもちろん湖です。「ガリラヤ」というのはヘブライ的な言い方で、「テベリヤ」というのはギリシア的な言い方です。

² 大なる群衆これに従う、これは病みたる者に行いたまえる徴を見し故なり。

³ イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給う。⁴ 時はユダヤ人の祭なる過越^{すざこし}に近し。

これは過越に出掛けて行く群衆なんです。キリストはこの時は行けなかった。前に非常に危険なことがありましたから。

⁵ イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見てピリポに言い給う

特にここには、ヨハネ伝は「ピリポ」と書いてある。



『われら何処よりパンを買い、此の人々に食わすべきか』⁶ かく言い給うは
ピリポを試むるために、自ら為さんとする事を知り給うなり。⁷ ピリポ答えて言う『二百デナリのパンありとも、人々すこしづつ受くるになお足らじ』⁸
弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子あり、大麦のパン五つと小き肴^{さかな}二つとをもてり、ここに特に「大麦のパン」と書いてある。然れど此の多くの人には何にか為らん』⁹
どうしようもないと言う。

¹⁰ イエス言いたもう『人々を坐せしめよ』その処に多くの草ありて人々坐せしが、その数おおよそ五千人なりき。¹¹ ここにイエス、パンを取りて謝し、ここには「天を仰ぎて」とは書いてない。

坐したる人々に分ちあたえ、また肴をも然^{しか}なして、その欲するほど与え給う。

¹² 人々の飽きたるのち弟子たちに言いたもう『廃^{すた}るもののなきように擘^さきたる余りをあつめよ』

無駄なことをするなど。

¹³ すなわち集めたるに、五つの大麦のパンの擘^さきたるを食いしものの余り、十二の筐^{かご}に満ちたり。¹⁴ 人々その為し給いし徴を見ていう『実にこれは世に來るべき預言者なり』（ヨハネ6:1～14）

そういう、共観福音書およびヨハネ伝の共通の記事が、これだけが四つの福音書に出ているというのは不思議なことです。まあ

「大体、こんなことがあるか？」

と、百人のうちほとんど百人がそう言わざるをえないでしょうね。我々の学問も、常識も、科学もこれはどうにもならん。

「二百デナリのパン」というのは――一デナリが一人の一日の労賃ですから、ちょうど一人の二百日分の食料にあたるわけです。けれども、五千人もいたのではどうにもならん。「たとえ、二百デナリのパンがあつても」ということで、あつたわけではないですよ。ところが、五つしかない。

その前に十二の使徒を遣わして伝道をさせた。まあ一時的に聖霊の働きはあつたんですが、それは一時的な話です。そのことはマタイ伝に出てますが。それから、洗礼のヨハネがヘロデとヘロデヤによつて――ヘロデが何でも与えると言つたら、その娘が「彼の首を献げよ」と言つて――とうとう、ヨハネがそんなバカらしいことのために首を切られてしまった。ヨハネは預言者ですから、

「ヘロデが兄弟の妻を得るとはけしからん」

とはつきり言つたことがきっかけですけれども。



●神さまのエネルギーに満たされる

キリストは、神さまとの交わりは特に「寂しき処」、大体、山です。山でも曠野でも、要するに人里離れたところ。そこは何といっても、祈りには非常にいい。我々は東京にいます、「寂しき処」はない。東京では、「寂しき時」です。夜中、夜更けてからか、朝早くか、どつちかです。静かな時、寂しき所、そういうのが祈りには非常に大事なわけです、時と場所を言うならば。

この奇蹟が行われたのは、ガリラヤ湖の北の方のカペルナウムから少し東南に当たる所です。いつも言っているとおり、祈り入る、祈入です。寂しき所、静かな時に神さまの中に彼自身は祈り入るわけです。全的に全存在で。ただ口で祈るのではない。これは何のためかという、神さまのエネルギーが自分の中に入ってきて、神さまのエネルギーに満たされるためです。霊的生命に、霊生に満たされるためにです。神の御意、聖意とよく言いますね。神さまの御意には、観念でないから力がある。霊生と聖意とは離すことができません。湖の上を渉ることは今日の記事の次に出ています。それもやはり、祈り入って、もう全存在が物理法則を越えたようなことになりますから、湖の上を渉る。火渡りなんていうのがありますけれども、まだ水渡りというのは聞いたことがない。キリストだけがこれをなさった。大変なことです。まあ一晩くらい徹夜するようなつもりで、一遍そんな祈入をやってみてください。

群衆は過越の祭に行く、そのところでキリストにこうやってつくわしたものですから。特にピリポが――いつもよく会話するのはペテロとピリポですが。ヨハネは言わない――ピリポはかなり知的な弟子だったとみえるね。すぐ数字が出てきたりする。

8 弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言う『ここに一人の童子^{わらわ}

あり、大麦のパン五つと小さき肴^{さかな}二つとをもてり、

と。多くの人は持つていないからどうにもならん、というわけです。この少年はどうしてこんなものを持つていたんでしょうかね。大事にしまっておいたんだね。他の人たちも全然持つていなかったか、それは書いてない。けれども、どうも大体においてなかったらしい。ある註解書では、

「みんな隠して持つていたのが、キリストに言われたから、出した」

なんて書いているのがありますが、そんなのはちよつといただけでない。五千人ですね。みんなグループで草の上に坐ったという。

ヨハネ伝は、大事なことを抜かしてしまっている。さつき読んだところのマタイ、マルコ、ルカでは、

「14 イエス出でて大なる群衆を見、これを憫^{あわれ}みて、その病める者を医^いし給えり。」
(マタイ)

「34 イエス出でて、大なる群衆を見、その牧^かう者なき羊の如くなるをいたく憫^{あわれ}



みて、多くの事を教えはじめ給う。」（マルコ）

「然れど群衆これを知りて従い来りたれば、彼らを接けて、神の国の事を語り、かつ治療を要する人々を医したもう。」（ルカ）

とある。キリストの病を癒す心根はもちろん、「憐れみ」です、愛です。これは生命の本質は愛です。愛を持たない生命は生命でないと言いたい。神さまは「永遠の生命」というけれども、ただ時間的に永くたつてしようがない。人を愛する生命。愛するとは人を助けること。人を救うこと。正に救助だ。具体的なんだ。単なる感情ではない。だから、愛するとは生命を与えることなんです。神さまの生命をキリストはいただいていますから、そうすると、その愛はもちろん力を持っている。力ある愛ですから。生命は力を持っている。だから、これは作用する。作用して、そして治つてしまう。もう私はさんざん今までに経験していますから。

●無限無量の生命の徴

もうひとつ大事なものは、マタイ伝では、

「¹⁹斯て群衆に命じて、草の上に坐せしめ、五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンをさきて、弟子たちに与え給えば、弟子たち之を群衆に与う。」（マタイ14・19）

「五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝し、パンを擘^さきて」とある。

マルコ伝では、

「⁴¹かくてイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちに付^つして人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給う。」（マルコ6・41）

「天を仰ぎて祝しパンをさき」とある。天を仰ぐ。この「天」はもちろん、神さまのことで、すから。キリストは天を仰ぐと、もう天の中に入ってしまうわけです。仰ぐと同時にスーッと神の中に。そして、パンを裂いた。この「パンを裂く」というところは、最後の晩餐、それからエマオ途上のキリスト、あれはみな「パンを裂く」ということがある。

「これはわが体^{からだ}なり」

と言って、パンを裂いて与えた。

「我を食らえ、我を飲め」

という言葉がこの6章のあとの方に出てきます。キリストにとつては、「パンを裂く」というのは、生命を分かち与えることなんです。

「我はパンなり。我は天からきたところのパンである」

と。ヨハネ伝6章48節に、

「⁴⁸我は生命のパンなり。」



とある。41節にも、

「われは天より降りしパンなり」

とある。キリストは、「パン、パン」と言っている。自分はご飯だと。こちらで言うところ、米だと。我は稲なりと。キリストはパンを裂くと同時に、彼は自分の生命を裂いているわけです。だから、神さまの生命が裂いたパンに通じますから、キリストの生命は無量の生命なんです。相手が五千人いようが、一万人が構わない。十二の籠になお満ちたりと。余るほどあったという。キリストの生命が無限量のものであるということの徴なんです、この奇蹟は。創造の神が五つの素材をして千倍に増やした。これが本当に神さまの創造の生命です。そのままキリストは受けとる。キリストというひとは神と全く一つ。全的なんです。

●絶対次元の靈法の働き

こないだ映画で見た「空海」の宗教も、体と心とが一如の世界を展開している。復活の生命がそうだからね、魂だけではない。霊体、霊体をちゃんと持っている。人の救いというのは、我々の救いというのは魂だけが天界へ行くのではない。魂は裸でない。必ず、霊体を持っている。全的なんです。そういう全的な、全一的な、全人的な角度でものを見たり、感じたりしていたのがゲートルです。ゲートルのああいう渾然たる宗教的な心境というものが分からなくて、「ゲートル、ゲートル」なんていくら言ったって、つかめやしないんだよね。

驚くべき奇蹟だけれども、その奇蹟においてどういうことが展開してきたのか、ということは私たちは信じ入ることができる。信入することが。科学万能とか言って、もう他のことは何も受けとらないような魂は全く気の毒になるよな。科学とは何ですか。人の知的な働きの高度なものでしょう。ところが、人間というのは、知情意と、その上に霊がある。この霊の世界を忘れてしまった。知情意の世界を統括するものはこの霊の世界だからね、魂だから。

意志と感情と知と、カントの哲学はこの知情意の世界の分析なんだ。これの検討なんだ。純粹理性批判、実践理性批判と判断力批判。その探求においてはカントの右に出るものはない。素晴らしい。またカントからヘーゲルや何かいろいろ出てくるけれども、元はみなカントです。まあプラトンとカントだね、哲学界の二巨星は。ソクラテス、プラトン、カントのこの三人は大変な人だ。一切の哲学はこの三人においてすべてが原型的には展開していた。中国では老子、壮士、孔子、孟子なんてなところだね、凄いのは。大体、時代的に言って、あのへんの紀元前5、6世紀のところは似ている世紀だ。預言者が出てくるしね。霊的な時代としては、紀元前4、5、6世紀のあたりのところが世界的に最高なところだ。もうそれからとはダメだ。キリストは全然、別格だけれどもね。

だから、霊の世界は限りなく高いし深い。我々は「エン・クリスト」、キリストと一つになる。



「キリストの中に」という。中に入ったら、いくらでも自由に出られるんです。出るというのは展開すること。

こんな不思議ないわゆる奇蹟も、実はもの凄い次元の高い霊法が働いているところ。奇蹟ではない。絶対次元の霊法が働いている。まだ水を葡萄酒にするくらい何でもなかった。第一の徴。第二の徴もこないだやったね。これは第三の徴だ。この第三の徴は――第二と書いてないけれども――これはもう最高の徴です。というのは、

「私の生命は、五千人であろうと一万人であろうと、地の果てまでも世の末までも生命を与える」

と言う、今、霊界にあるキリストは。

「我というパンを食べれば飢えないぞ。我という水を飲めば渴かないぞ」

と。こういうことです。キリストはそういうパンであり、水である。

断食の目的は何か。この世のものを食べるのではなくて、キリストを食べるためだ。キリストを飲むためだ。

「キリストを飲め、キリストを食べろ」

ということ。そうしないで、ただ我慢して断食したって何にもならん。

要するに、五つであろうと、七つであろうと、構わない。「裂く」ということを具体的に、自分の生命を与えることを具体的にそこに示された。五つのパンはそういったキリストの無限無量の生命の象徴です。そうすると、裂きながら、自分の生命を与えるパンが、パンを素材としたものがグングン展開してくるわけだ。原子力のちょうど、原子核が爆発するように、元始生命が展開したわけです、キリストの元始生命が。

パンを膨らます酵素、酵母というのがある。キリストはちゃんと霊素を持っている。霊素^{もと}。霊素が働く――まあ少し科学的な言葉を使うならね――霊素が働いて、五つのパンどころの騒ぎでない。五千人のパンに増えてしまった。

だから、皆さんね、おかずがなかったら、ご飯と梅干でいい。梅干もなかったら、塩でもいいよ、塩おむすびになるね。そして、鰻^{うなぎ}が好きだったら、鰻を瞑想してください。鰻を瞑想しながら食べてごらん。なんとなく鰻の味が出てくる。それでもう十分だ。ちっとも困らない。そういう秘訣を体得するような魂にならなければダメですよ。私みたいな単細胞はそういうことができるんです。足るを知るところではない。余ってしまう、キリストと同じように。だんだんそういうことになってくる。

日本人は「経済、経済」と言っている。経済大国だと。経済大国は霊的貧乏国だ。学校の先生が組合をつくって、ボータスが足りないの何のと大騒ぎしている。何をぬかすかと。私は一遍、大喝したことがある。「何事だ!」と。明治の人間はとにかく相対的に言っても、耐え忍ぶことを私たちは学んできました。物は

「もったいない」
「勿体ない」



といって、無駄なことはしないようにしてきた。今は捨てることが仕事みたいなものだ。それでいて、また足りない足りないと言っている。感謝して受けること、「はい」と言つて感謝する気持ちがなかったらダメです。

●クリスチャンは絶対孤

私みたいな本当の預言者は――私ははつきり言いますよ――普通のジャーナリズムには分らないんだ。孤独ということは、あなた方だつてそうなんだよ。みんな本質的に「神――キリスト――我」というこの関係は孤独なんです。みんな孤独です。それが横に行つて初めて孤独でなくなる。縦の関係は孤独です。横の関係で孤独でなくなる。これは共在になる。これはまた熱い関係になる。普通の相対的なものよりもっと熱い関係になる。ただし、この縦の孤独を持たなければダメなんです。この縦も、神さまとの共在も共在であるけれども、人間としては正に孤（個）なんです。これは絶対孤なんです。クリスチャンは絶対孤なんだ、本当は。絶対孤は、今度は真の相対の世界を持つことができる。絶対相対と言つたつていい。そんな言葉はないけれども。絶対的相対というものがある。絶対的相対とは何ぞやといえば、絶対孤を持った人は絶対的相対を持つことができる。言葉の矛盾みたいな話だ。絶対に基づくところの相対なんです。宗教の世界はこの絶対界なんだから。我々はみな孤なるもの、孤独なんです。しょっちゅう、コイノニアとか何とか言つてね、「ワッショイ、ワッショイ」なんていうことではない。

「我を飲め、我を食らえ」

という。祈りの世界で、それが飲みまた食べられる。祈りの中に深くなると、本当に楽で行き詰まりを知らなくなる。いろんなことに遭つて、行き詰まれば行き詰まるほど逆に展開していく。本当です、これは。逆比例する。相対的現実には逆比例するものが本当の信仰の世界です。御利益とおよそ違うんだ。

「最悪は勇者にとつて最善なり」

というのは、最悪は本当の信仰者にとつては逆に最善となつていく。

「私はこんなことになつてどうにもならん。自殺しよう」

なんて、冗談じゃないよ。そういう世界です。

空海は天地と融合するような境地を持つている。このキリストの世界に入ったら、親鸞であろうと、道元であろうと、日蓮であろうと、何でも読めてしまう。皆さんは、あなた方一人ひとり生涯の課題を持つているから、このキリストの境地から、何であつても展開していきますから。何をやっても。これが

「われ一切の秘訣を得たり」

とパウロが言ったのがそのことなんです。



●「己を裂いて与えるような霊的生命的証者

そういうわけで、この五千人に驚いてはいかん。キリストは無限無量のことをなさるので、この場合は五千人で、あるところでは四千人というところもある。何千人であろうと、何万人であろうと差し支えない。とにかく、今、全世界に、また世の末までも、キリストというパン、キリストという水、キリストという火と一つになれということ。ただ

「信じます」

なんてなことではダメだ。キリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。我々は、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、破れ器がそのことが言えるんです。

「こつちが立派になったから」

と、そんなことでは絶対じゃない。このボロ器が、土の器が、それが

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言える。皆さん一人ひとり、それだけの我ならざるところの我の自覚、自信、これを持つていかないとね。これが本当のクリスチャンです。だから、

「聖霊を持たざる者はキリスト者にあらず、キリストの霊を持たざる者はキリスト

者にあらず」

という。キリスト直結、使徒的信仰です。

これから10年、15年と、100を突破するような気持で私はやっているんです。何も年齢を言うのではないけれども。どうぞ、そういうことで、この驚くべき、

「天を仰ぎて、己を裂きて、与え給う」

ところのキリストの生命をいただいて、そして、もはや行き詰まりを知らざるところの、我々自身が

「己を裂いて与える」

ような霊的生命的証者とならなければ。

この五千人の奇蹟なんていうことをただ数でもって驚くのではなくして、質的にキリストはそのようにして生命を具体的に分けてくださっている。私たちもそのようにして、もう行き詰まりを知らない人間になったということがはつきり言えるようになっていきます。

寒いときにはただ暖房するばかりではなくて、グーツと霊的な祈りの世界に入ると暑くなりますよ。そういう呼吸も覚えたらいい。もちろん、ただ我慢していることはよくはないけれども。瞬間的には、カゼを引きそうになったら、グーツと祈りの世界に入ると熱くなるから。そうすると、何をかというわけだね。外を歩く時もそうですよ。風を切って歩く。大体、そんなわけでございます。今日はそこまで。

